諸國物語圖會拾遺

天

一休和尚

諸國物語圖會拾遺

五書堂合梓

前集自画像賛添文

山居寂僧聽松
風之圖意禪定
一休和尚自画自

賛真蹟芸軒不
可減謹編者
壽

曙月十六日

真珠
宗賢

辻説教殿

一休諸國物語関雪拾遺

天の巻

○一休和尚いまだ若く侍りしとき山城山人和のうの大徳寺と立出うしひ南山城にいるふくろうしふをさ寺一ケ寺あり寺号弼悲庵とやしぬさしもけまうしく絵を描屋さ絵もしをくまべ古のづうう壁千の住都とかうく妙ちさ者を壁を罪ぢもぐくい新とおとちりひつ物すきまぢきこうなう不のものどもあうやうくまであまとそいへ絵屋きとつくる絵乃なれ四名ちり志ろぐき絵もおうら侍ふさ山寺へすを中家とうまやうやと所のことの、はぐしい寺ろやくまべ和尚はくぐくと号ささも風景と

ひいでもてき寺なり我ふあ〳〵なぐ住ものすぐ〳〵と
乃〳〵まへぐ聖人を集をそろえ見まぐ徒ぐきとゝ乃遊
六七人もいろ〳〵とゝすゝ忘れ拔ども中ら夜のまふ勇ゆう
まゝの切傷もなくうう接〳〵のあやしき事ぐう新〳〵ぐ
いゝ〳〵聖人とても驚ゝ切かへとなくあまとてゝいとかう
多まぐ一休つゞゝふ夢て若〳〵ぐいゝも我住ものすぐ〳〵あゝへ
あゝそ仰多まぐ聖人ども四〳〵ふわゝさ心傷のいゝぐう事と
ぐいう中もいや〳〵深傷も美紙て年ふよりぐきてゝふあ
らずとゝつる者もあり〳〵ば去ゝ〳〵ぐ生傷〳〵ゆすべ〳〵こゝあ〳〵
中多まぐをゝうこと四流ありいゝゝ去ゝとゝ心ぐ徒ぐ美四
ぐゝてやゞ〳〵出ぐゝ〳〵人在所乃ゝとめぐもゝまとゝゝゝ〳〵
ゝれまぐあゝきゝの冬井とのゝゝぐやまゝ〳〵拔〳〵ゝとめ

中ぐもたく我ふ傷をゝとのゝ仰ゝまひたぐひゝうすゝ〳〵
ゝと若〳〵てゝゝ古寺のまゝ〳〵なゝふを夜ゝすゝ燈灯を
のゝ傷〳〵〳〵夜のゝふけ切をまゝ人をゝふ四の刻ゝうゝ
あゞ〳〵きゝゝれ寺のゝゝ震動〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳
乃ゝゝさ寄〳〳年の往ゝ二八ゝゝの女いゝも宮新美蓙乃
すぐゝて勿紙〳〳あゝゝまて一休の四をぐゝ人あゝゝ
ゝゝ和尚すゝゝも強ぐたまゝゞ大ゝゝ石わゝゝ拔ゝゝを
ゝゝのゝま人があゝなゝ消ゝ口四志ぐ〳〳ゝ年
ゝゝの四紙ゝゝけゝ拔ゝゝ夜さむゝ酒をゝめゝて
まゝゝんゝたゝゝまゝ四をぐゝふゝ人あ四ゝゝ一休あゝ
をゝどゝをゝまゝぐゝさゝぐんのゝゝ人ゝゝのゝ人ゝ美
も四〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳

うちうえしさひ寺門中すさまじき稲びうますくそさ
ゆづくてらけて又ごろのはゆ仰おりくいわうどんと病のく
やさかわくく眼ろ糸をめうろうぶくおそろくさあるる
ろくひうくうとあめぐうり紙置のトと志きうふうとうづめ
う一休はとやらんごとうとまで知うとまおくもろうれ
くやくちろへ帰まとうのうまへうつときくうとめ
うとうくかのくくう夜もあけまど在所のうちども
大勢がさそひ合かの寺へきうとをいかの一休くく
うえくく変化のこのふちうるのむうんうくく
ふ仏などやくく一間ゆうりもるぶくふうひくく和尚はお
くくまけう一休はやわくをのくくらくふうびまど
うめうくく寺の戸ゆれうをひうくく門のあくく出うやひうまど

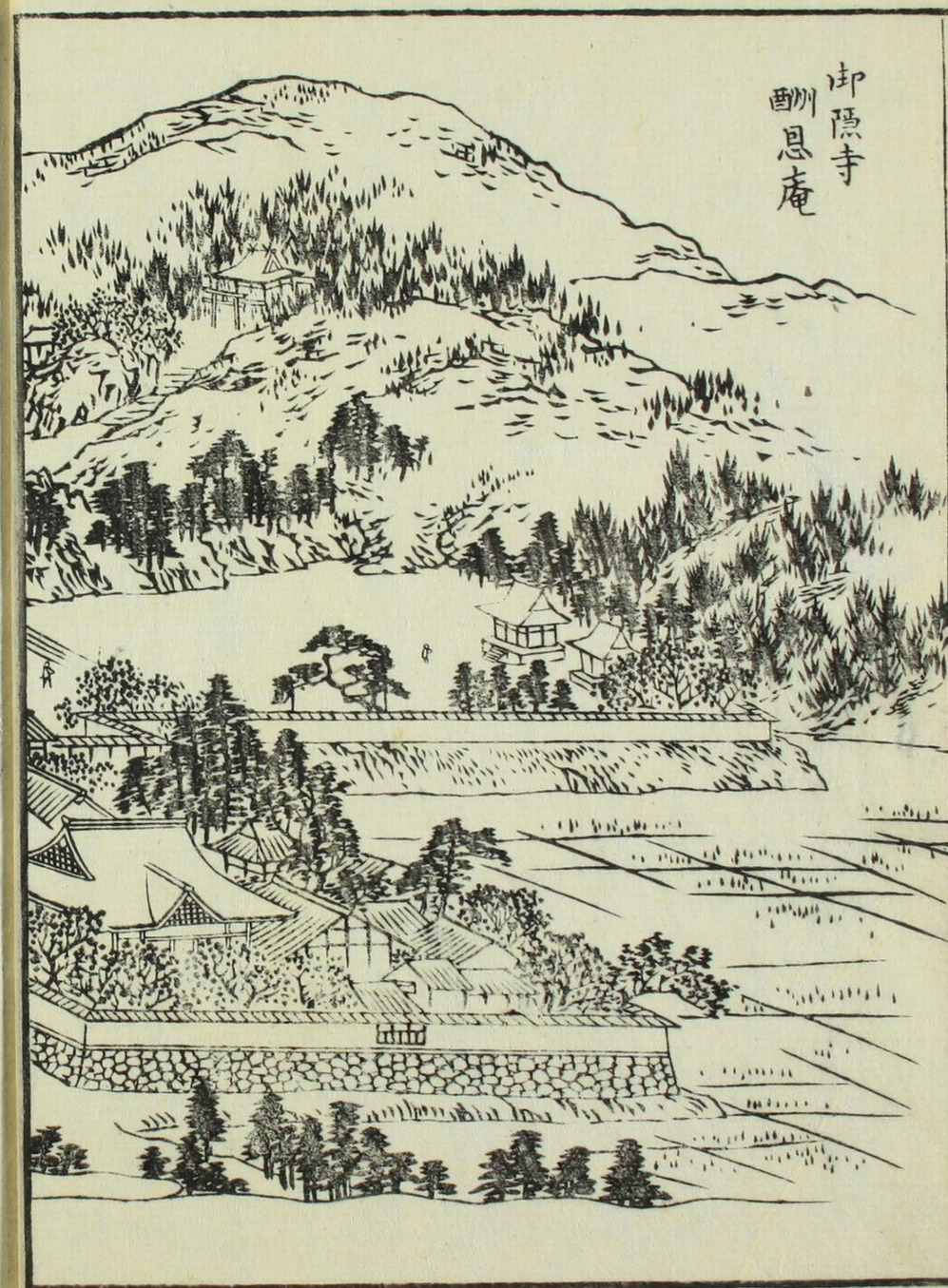
ふうふうとうんびはくちうびはくいなうもちつまうびうくそ和尚拍
とうくうとはくく寺へ入うる一休のうまひるるいまづひ
寺とうづく仏堂のもとをふうくこう入うぐ一間四方と堀く
えうくのうまへを在所のうものどもやうるぶ仰そうれども
ひ寺い年久しきと和い拍ふあるる寺のうちやはうへ
はうぐうこうちやうん半いうぐうとうとうへうやうまい一
休寺とうづくくうるうぐ拍寺とうづくくうふ
いうくうがうんとも戒達立寺へ入くくう仰うとうさいい
うとうんうとへうあつまうちをうづく仰ぐうんのもの堀多
うんまうぐうおいうぐとつめうる壷こつまそのり出うるうを金を
一つぶうる化所へうとうくくひうろい所のうとれどもへれくセさ
ましい砂うへうくそ居つうくくう夫はうくくうる事徳とう建立く

なまじいとりつきの手付より弼忠屋と大徳寺の来書と宗
めらまこと山寺ふ一休和尚仏祖をこまの事と久しう名
乃世ふいるまま一休和尚の四恩居の事とやしと
さうふうこ四恩の恩仏菩薩あまこと有ろ山城大和
ふ長まても眼ひふんこと絶家法人の目とおころこ
姫士のこれ考きこと いこと ず あと こと び 春ろこと秋い
もみちつりしも 杉葉 うなこ 鮮をなこ ろ ろ と や

地獄乃問答の事

○一休かしのこと 志づこ 四恩道留のこと 地獄なこいこと
ふ山あり 右孫も又多 多六一人のこあり 立出こ ひ ろ
と和乃地獄の〇こ 南浦ふこ事をこ 出ふ 山のはし
こまこと わづこの 俳まこと ふこ 紙こ ひ

そもなる法師と地獄 地獄 極楽いまと 問ひ 一休
まこと ふ 角とこと 業とこ 人とこ ひ 地獄
ここの知ふ 極とこと ふこ 恐ろ 知ふ 見ると
世ふ いまこ 知ふ 知ふ まこ 知ふ 知ふ 見ると
こと ふ こ ふ 手ふ いまこ ふ こ ふ こ び
一休 ふ 地獄 ふ ひ を 地獄 ふ こ ふ こ び
地獄 ふ ふ こ ふ こ ふ こ ふ こ ふ こ ふ こ ふ
しこと こと こと こと こと こと こと こと こと こと
わづ こと こと ふ 一休 と の 世 和尚 と ふ ひ ふ
こ 極こと の 極楽 と こと 人 和尚 と こと び 離 ず 地獄 ふ こ
こと ふ び 一休 こと こと ふ こ こ ふ こ の 極楽 ふ こ と 乃 こ ふ ひ
ふ こ と や

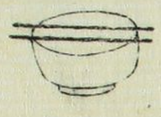

御隱寺
酬恩庵

雅喬

文字の比丘の事

○一休和尚の弟子のうめうて常ふ粥とまわりあるところへ
長谷川与右とうく小ざうき写しあらせてゆわ体のさ
さうく和尚うへけるのうへ物ゆうのてきさの山うのと
中ず文字へあるきふうをちさ中ず来ちふ文字のと云
うえあるこそひうめ我ホふーん面白ごんでいてと
かのとゆうものハれの中へ来と入きあるくやうふ梵
うとかのとゆうなまびさんげのう来ちあるひハ今ハ庵
う湯などーうちをつきうの中へ粥ふいうなるまゆうとあう
ふちゆやうんと後ずまび和尚こうへ宮くゆ宮えまゆうを
わき昔大唐ふ祐農伏犠とく重きあるーうそうとと
いまーぐ文字定まーーど来食良などの文字ハあれども粥し

いつ字なううしと伏犠祐農をれあまと重要ちと集
やい来とあるの中へ入き来ちあるくもちゆれで
後中ちのひく消やすきことのなをども此文字いまく
定まーーぐいくう造うつまやとをうまでも行きもあるまを
かうぐけうまーぐとも来ーーうの人も思ひ出ーーうら孫ハ第ぐ
うまーひくうくうをを梵ーーふうのうハくうさんぐと
消あつくやひ出ーーううぐハ祐農うとうの系者を
ううくう宝白ううぐうのやうく



くのーくうくうそことをあるきうちと
ちくく中ふ来と云なうとうくうする与右をを
掘くくゆううハ天時ハうとんさくそまーーのす いうう面
白ものなうくう来うとハいまーぐ行をゆうぐ系やとをもうち

あけのこゝの半とて叮くと名ひうさんばしあてさうけて
又石蕾にてこゝへ只うのごとくわらへとうてをと竹冠に犬
と云てをのかやぎうさらへとふ文字口篇にひらがうと
用ふ蕾ふ能なごくてちづきをもてをの竹ものに犬と
いつかちいつるる石鉢こゝ　ちやひぞとうれんば一休宗
ゝ作ゝゝこゝふ是を加四とて屋に紙にこう矣といへ
字とくまんとてこのまと聖愛なるひ屋のへ魚へかさおう
らこ鈴とうづゝもぐけ紀ゝ人こうをこどつと第ひ
さへこうれまとて太のこうふかくこのこゝひうつるゝてを
まを石ぶ　おりうきゝ半うれとかんづるゝ屋と和尚こまは
いうこうを如体文字をいつとの一くこう理と見めうこの
そこどるを日用こゝゝ半ひいなこゝ金こへ文字こう

中もこゝ作ゝうる文字をそ紀蕾經の中こも金狼瑠
璃硯梁なゝ七つの宝とひひなゝべ半へ書ゝ金
狼といゝゝあるこゝ金狼なまでも持ゝこ人ゝうこ紙び
宝こふなこゝ作ゝ人こうつ字の下ふこと字とうこて
金こうこ字ゝ漬を行こうこうしるうこのでいなこと作
こまこゝ紙こふつひながうこ山男も行こうるどんとつこさゝ
ふひゝゝ和尚こ白宝の作こゝ蕾ひゝゝこゝこきふつこも
人のこうこでも蕾字こゝ玉ゝやうふうきこれゝば
ここつ字ゝふひしこうふやうふ春ゝ半ゝこゝ半こゝ
さゝわがを石蕾ハなゝて半ゝつあこゝこゝ半こゝこを宝が半一の宝乃
つけゝまこうこ一日もなゝこうこゝこうこゝ大切の金なれども
まんでい彩こつゝ作ゝこゝれば和もゝ

時ならぬ四つゞ孫とやしよ一せの恵をゆるす年よと拝ひ
くちそ敬をれ

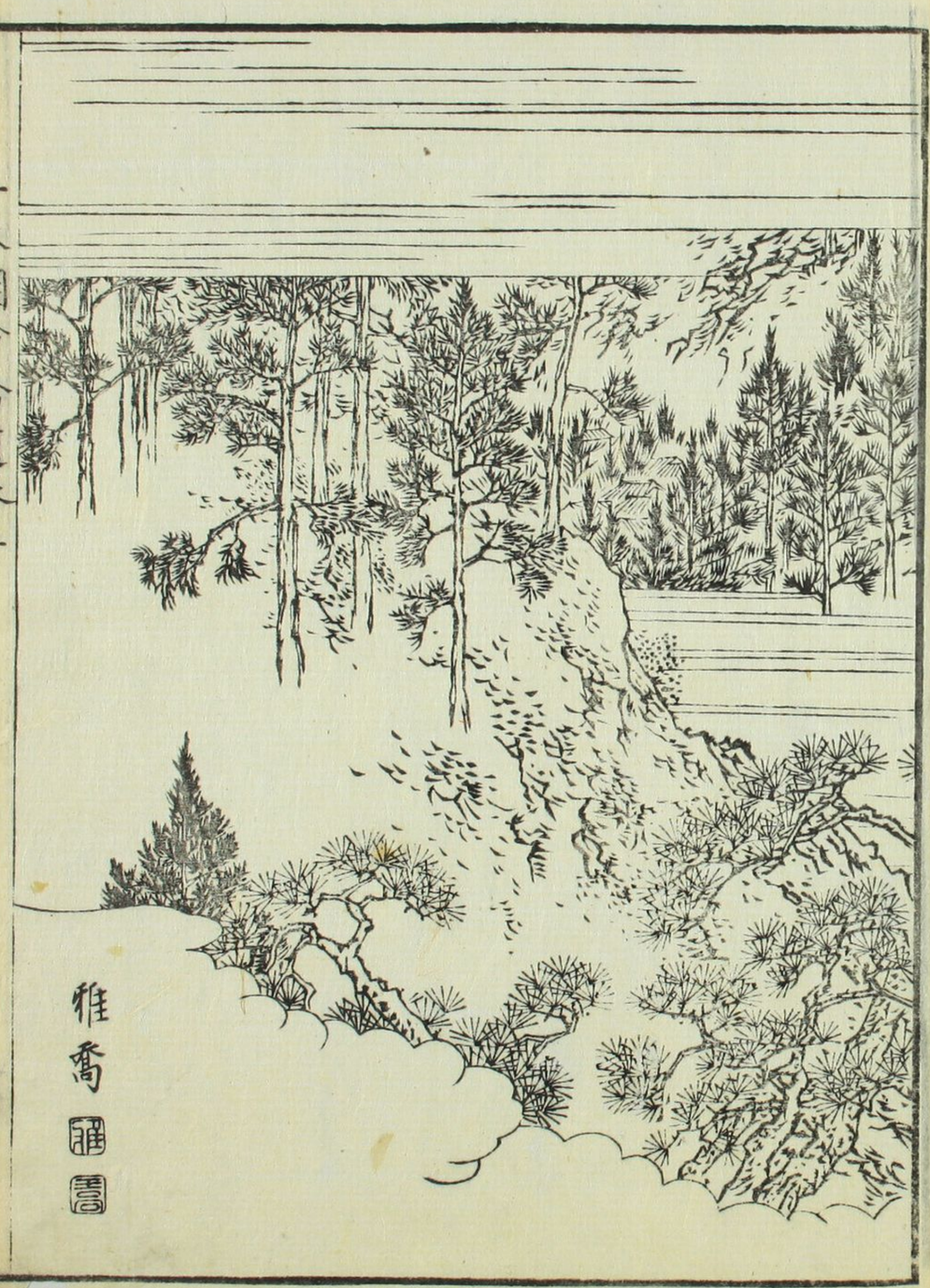
天狗問答の事

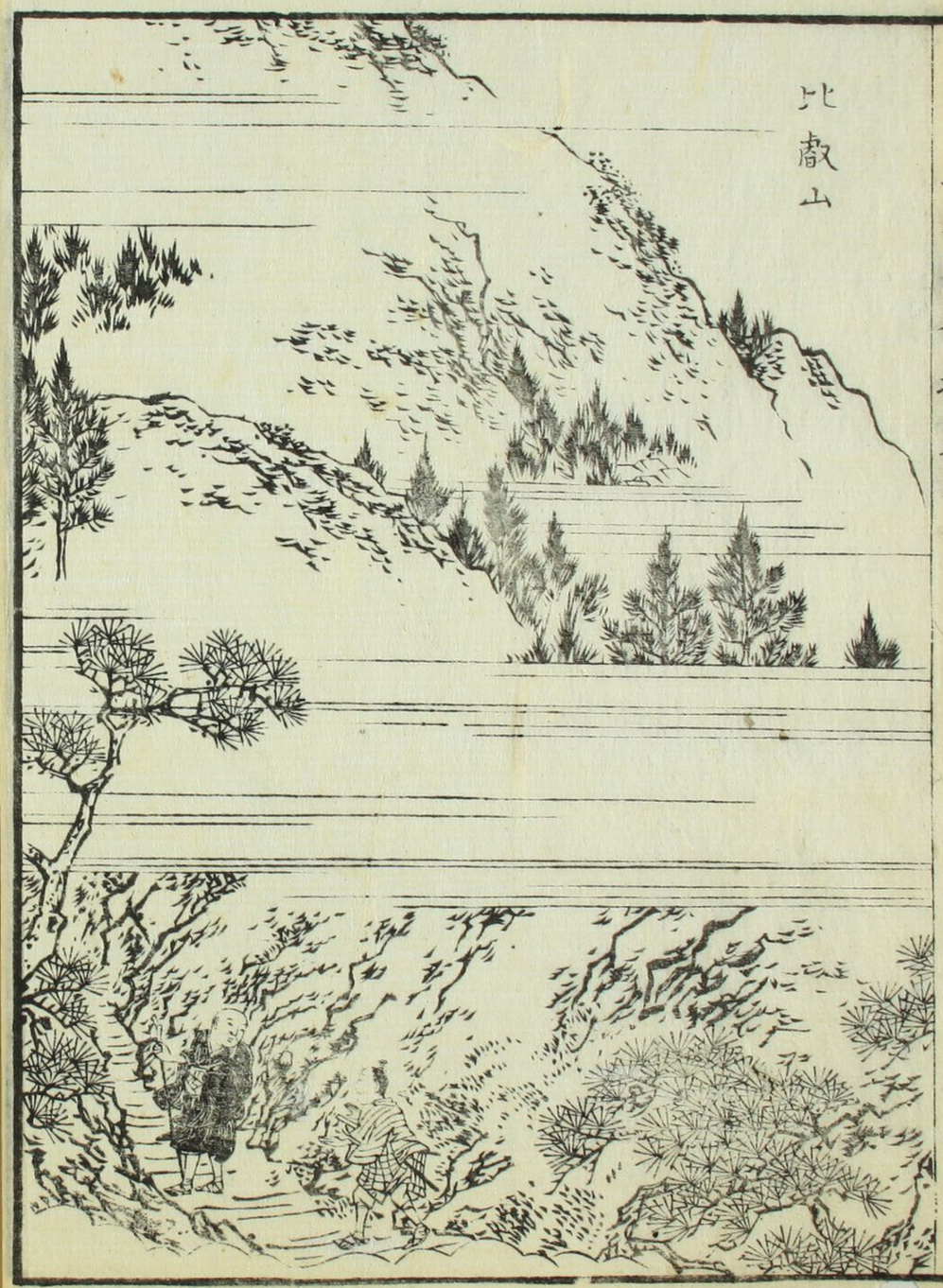
○一休事僧乃まかり方の弟子一人のこあ系結なきを
くうすぞふ四位ちく与こ志げをうる蟲の赤法う
ゆをのも知をず丈ケ七尺人あまりの山伏つゝ出来ら和尚
ゆ問ひうみけるをゝ狗ありく
佛法ハつゝ
ゆをのゝ　さくの剣くうんそ水のめく なり刀とめをて
仏めふさあてくくゝ一休すゝもるぎ
春ぐふさくや吉野の山ぐゝ
あとくくうんら花のあるを
と古歌を御ぐうひくまゞ 変化のゆ ゆくくきゝ

ゆ方ともなく消くゝ長いもめどくをさ絵をあを

軽口問答の事

○甲斐の国へ一休四ものゝをさ訳の系う結く和尚う
ゆ居ゝくをと字ゆゝ一休の軽口をまのあう
ゆんゝゆひめくうひの書ふありえいくるゆ和尚
ゆくと四ゆ字のをさ生徳磨のをさいんとゆ和尚
なくくゝゆあゝゞ喝とゆくゝ立をくゝいふゆ書
くゝゞも字なゆゆ系なとゆ字ゆゞ さ白をえくうる
四ゆかゝ結くゝひまゝ生の字ゆいなゆとゆ字
なるを徳磨をいもとゆんとゆ結くゝゆをのゝ字をくゝ孫
んゞゆくうくゝえゆさ一休の四ゆをゝをくゝ結ゆ西へ
和尚ゆ結ゆゝ字ゆゆをの童ゆけ出てなゆのゆもの時


雅喬


北叡山

いんとうの一休和尚あつまを著てもうしを燒てもうしを作りしば
しばえのごとく唱とて一休こうしをぐひうしく有りしをば
糸とのもとうしき中ふ紙なる半を著ごらまうら
ごうや

燒川　秀白　同巻

○一休ひえの山へ登りうしを燒川新蔵とよびしの山後
ゆきまうらう紙うし紙山へかしうし紙和尚うあ山ゆきうし白
ごうごうこうるゆたんうん山ゆ山ゆ
ひえの山後をひうひゆうふ
とうひもうあ
うしよけ〳〵ふうう四愛の紙とだうう
とはけうふうしうやきゆ紙ゆうるうきとう

山ゆうのうしうひく稱くの清新あり　前第一出ハ
ちうくゆ
愛文や二うんい紙ゆふふうひうふ紙て光方在中　陸川
金物と十人ゆたてなうむまい中うあんうう学文盲　一休

赤紙乃ゆ法の半

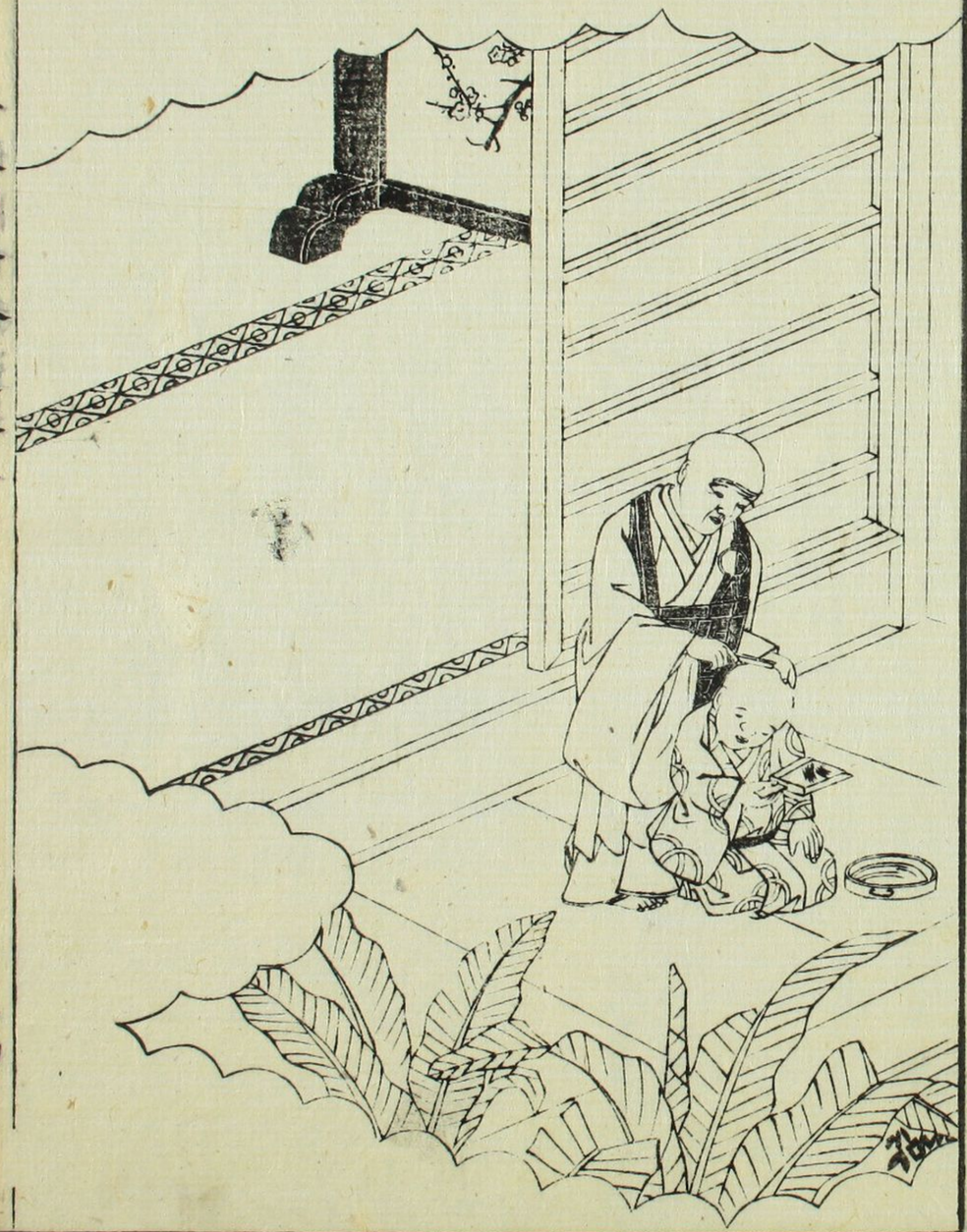
○一休和尚ちうしき在家い出ありしきあり高味
ちうして紙と書うるが高きうびうるうのて高く
和尚の南法をうふうんとうふうう光ゆいう出し
ゆうふ赤ゆもなうふうてい悟ひ掘りていうひ
姫和のうしうう赤うう石ゆうきうう
として和尚ゆ白せうんなまびもうう掘い白うまびきう
ゆ河ゆまうあいうんとて一休ゆうあ風情ゆうひうの
まあうゆうう赤ゆ一白なううまあうはてんふう

いのちのくるしさせめくるしむ時和尚そのいろいろこまりたる
ひとこころ食ものうるふるさとの
いくらうそもあること仰ぐまぶ言もはぶ折ふ
赤絵を地ようるひなくこころみんもはきぶうるとや

極楽のゆたかの事

○一休のゆかりへ日ごろ出入中なる白俗なるものゝ一向ゝ孫
沈の浄土ふ生まれん事を願ふ人ゝ多ありしかるに南峰乃名僧ときけば八宗九宗の尊ぶなく
ほとをとこゝさるふなゝあれども極楽浄土ふ
生ずべき事のほかのこふ思をこゝろるあるべき一休和尚
の門弟へ中ゝ多くそまれ一休ほゝく悪魔雪林の分と
生まれんべきおのちがらき紙性を異し中上いりやうを

修行より来世へかゝるべき極楽へうまれんとこゝろ
中に楽邪ふくひまふよりほの紙化ふ
うゝうふ地乃所を十万八千里のとをさあるとう
極楽ありと去あしうまれ去一休ほゝ地獄ごくゝ月のまふ
里のちがひも有まぶ去のわがふ百里や百
あるふう糸ほゝひも中ゝ弱ゝ大あまぶ
まと示しうゝなるべをもあぶゝさるる和尚ゝ
めしさまゝ迷地ふゝ去ものゝ者ゝ十万億土と流さ
ゝ屋敷のゝ去ゝ問あゝ流さ四縁ゝ此不思とあ
ゝ去ゝ去ゝのまゝ人ゝ俗ゝ中ゝゝかやうゝ丁寧ふ
ゆ去めしゝ和ゝゝ紙ゝ玉荘厳の極楽いゝ



中ともうしうるものなくいかなることをかたんぎろふ四方をあづうる家をもとめ一日
めしくらべ極楽国おふあるとしてもしかるに七宝さうぼんの
うちあるあいだ人の為に深くちかひを極楽にうまれ
人をうらやましがるとなるとなるとな

[illegible]

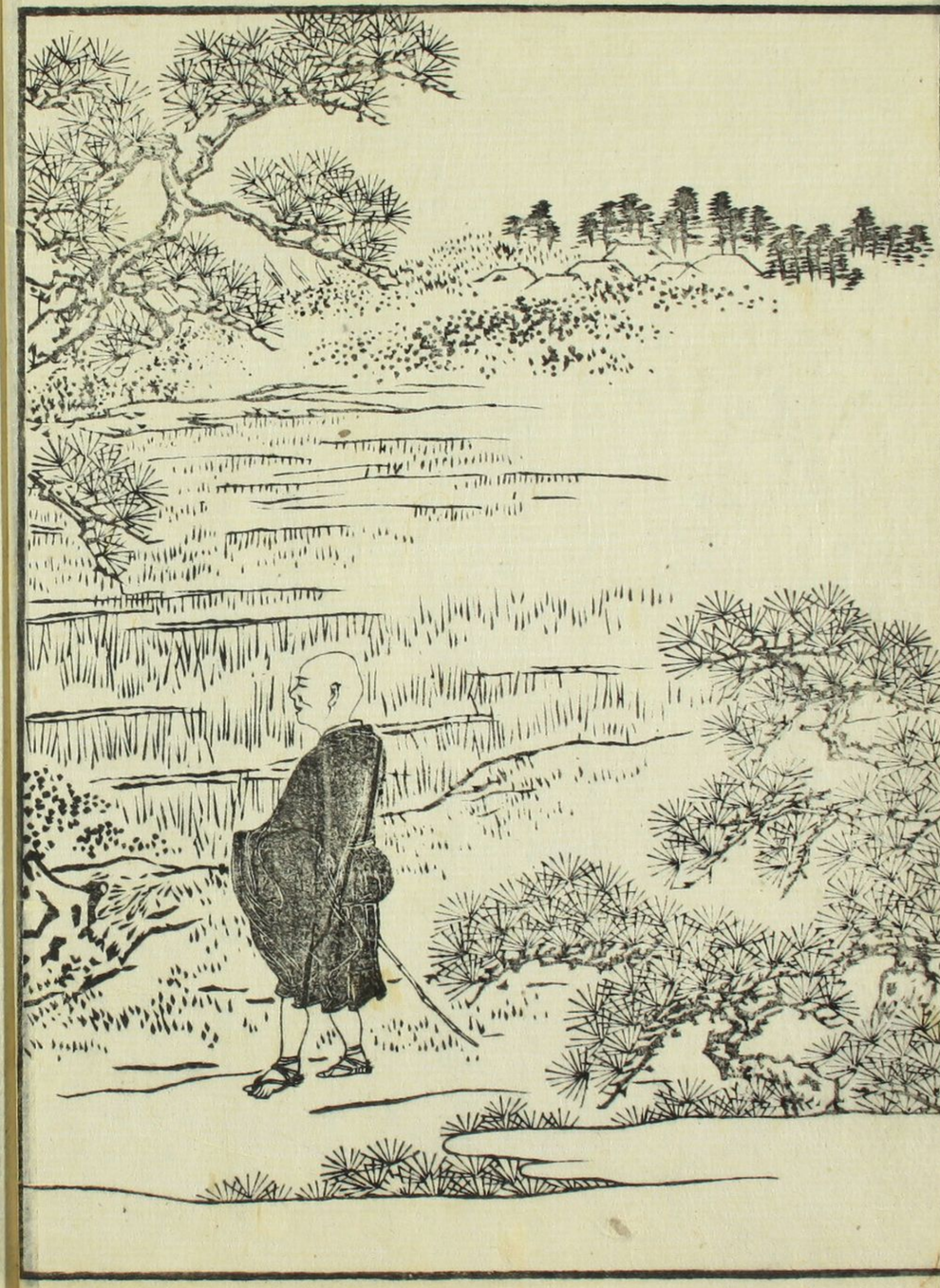
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



なく鳴くぞ乃ちとしかくかぶ拍子花乃城ふうとう夏
うしゝ　おうげうけうとうとうとうのちはけ引ふいうる
年そそあり久しく一休ヤ久しうんい死人をゆじぐしうい
ぬが孔くうゆ忘くうゆ年そそぐを指ぐしうい山修うう
ヤ年ゝそあるをしうげうう赤ゆう孤と知ようセうぞと
ヤうう年ゝそいゝとうゝ人のふゝうう

紫屋塀ゝを拵女ゝあゝその年

○一休和尚さうひの浦よりの紙あるゝとさゝ愛う繍者と富士
う家居のうちふ地獄という拵女ありけるものかゝ一休和尚
乃名ゆるゝをもう言を源しきう

山居ヒの源山北妻う行ゆしうふ浮世のさうひをう

一休ゝゝゝゝ五歌

一休ゝ分ゝ乃ゝ乃ゝ分ゝ市も山家門住家う
と迎歌しうゝ人ゝもおうゝ　ゝ　ゝ　

少納言をかぎりとして、ひとりとぶらひきたる。
給ふ。一休仰せられけるは、今日の会のなかにひるのほうとうを
一休ばかりもいらせ給はずとも、ひとりとぶらひ人に食
うきもうにばかりの蛭くもおりぶらひとぶらひ人に食
らうにゃうにの世界ハわまふ少納言とくまそうまくも
ばかりのうとさるに人にまに一休ふとちあもあつまうう一
大事のさふうあてなうにやいうあひとぶい人いぶんに
もあるに馬信か馬病をうてうしあうてうまてうしてて
なるとうと金色見とふさぎてちぶうしまうらふうの食
ら消うもうん小納言うう休うう有無深なうる事とや

大和尚の茶碗の打ものの半

○こうの茶碗ら茶碗なる仏ら彫ひあるもう

さうをもあるのにさうう名あるあるき藤と称る人あるく
あるとそうまうの彫ひをそて毎日くをううなくまで
名うまでふ四十余日ら乃ばでもうあるうまでなうるまでの茶を拾
さてまうくうさんぶふ悪いしうる拾うう一休和尚の半り
中中しういをきの茶ひふ出くあうくのうしゃうまでび
和尚中ら石しの作名うの中茶のまでいんうをいあるばうく
なんうら名と拾ひばうしさうう我いのうえんうて仕
号一首あそばし茶碗へ今ぐんまうぐいけうをうもべて
とのうまひうまでび病人うあびつをばてあうるが拾ま
五月中の二日なんば生雑録の中かあるい拾
毒安稿後生拾茶といのうもあう又南無茶碗弟尼
ぶえうう かまを御けうへうを御けうをけうひう人なにくうう

のこしまどわさるゝくて面白かなしびあるくに閑居く
人のたづまるとまちがるがやうに海東まもなくこゝろ
人ゝ句しゝ物所の住所と病人とゝろあかるまぶ仲
のこゝろと出しつゝんゝゝゝあけ
面白やゝゝ諸病悪隙の釋なるゝ
分ゝゝゝけの名しゝゝゝ
ゝゝもゝゝゝゝ閑居ゝ
むゝゝゝたゞ一時のゝゝ
おのゝゝれゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝ仏事ゝゝ
ゝゝゝゝまゞ分のゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝ法國海ゝ

出ゝゝゝゝ

一休高名くらひの事

○和尚ゝ高名すきゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ有といつゝゝゝゝゝの弟ゝ
の所弁ゝ小玉弁ゝゝゝゝ影ゝゝゝ
ゝゝゝ和尚ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ相ゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ小弁ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
返事ゝゝゝゝゝゝゝゝ

やうしんとゆ上ようまで和尚ようなづきようとなく為うりを和
までいさこれをやしんじゃ今いはりうや男うもなしとそ帰し
うしいりるとうや

仏様ふみ門の年の半

○
赤坂の宿くいつきとつる名うれ花女あうるゞ志ゞ
の病ひくく分ゆうりくうきうきくきをめゞも集くかけ
ふをを女ちゑ傳三位の孔あうさふまくく風呂の
死なゞ大うこうちかなふまゞや一休和尚と新
ものまつくく吊りんと心緒思へまうくく孔しゆうき
女ていひなくけふ門年なくぐれうあうくを
いくあとひくく結ゞひくを一休やさ半とそすゞ
るくくくそあくいうり門年新くる

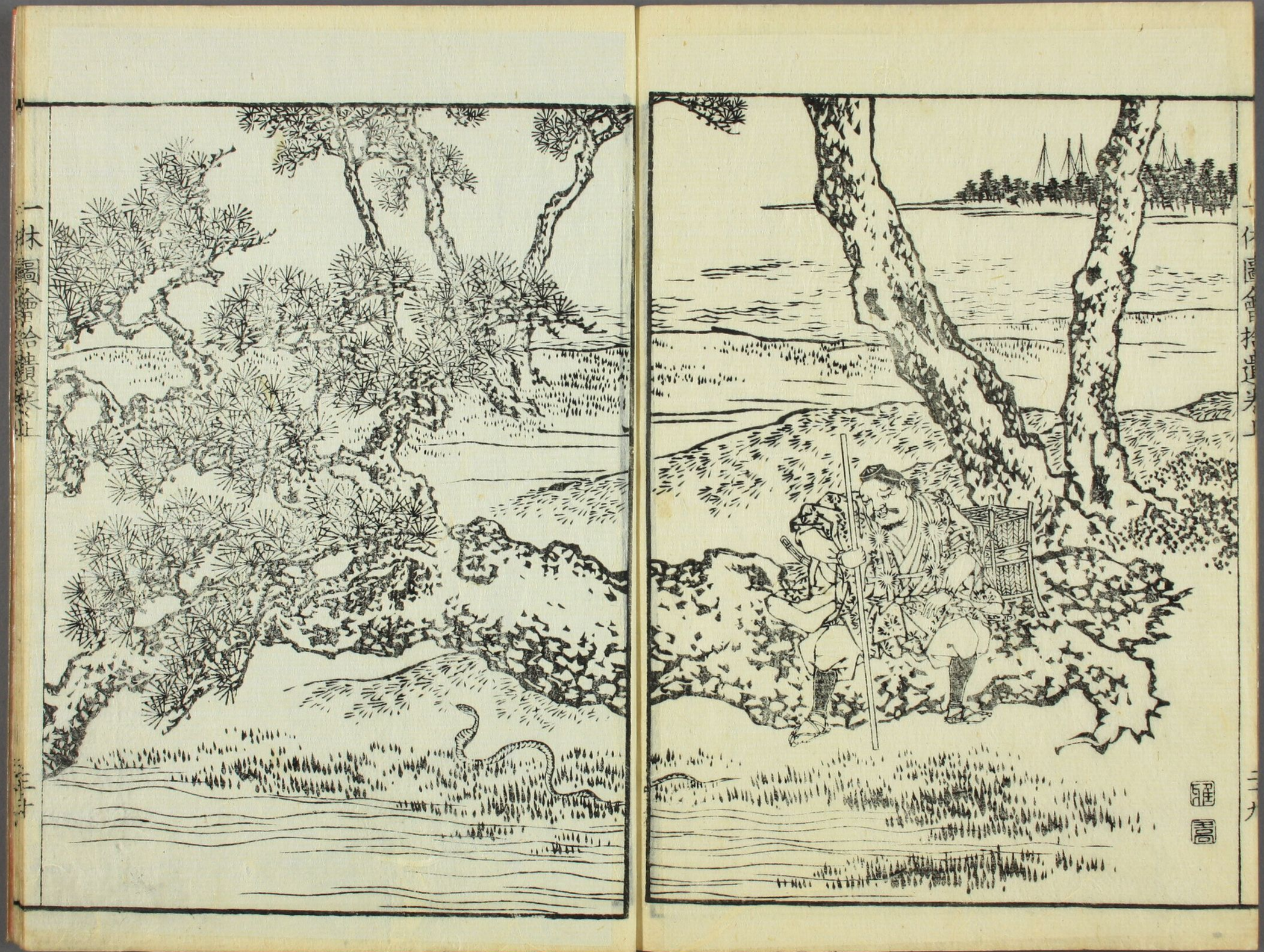
ゆうを衣を変を女い紅とうる柳いゞうり花いくまあね
唱とのくをひくまい檜のくらうよう光明くくやくとえくしゞ
剃をへをを後ようひゞう考くくなくうる若ゞもの夢を半
紳とゞるうを考くうを又口ふさ妻を男を仏様の
結ふうくく老のいくをゞ男あうくが病もなくて
新死なくうをくをあくうの若ゞもうを集くをうかゞくと
をくゞ意つけゞ香をくをを更くを甲奴なくくゞうゞ
新ふ一休門ふりあうくると幸ひの半とそくをゆ上
門年を新ひくをゞ

一ふく一ふん一紅の名未紅の一句をあの話
唱とゆう門年あうくるゞ昔も仏生をとゞくうとうゞうり
あくうの若ゞ夢くをくくくも

大食の山伏の事

○或ときさる所の大ぶうと人男あり一体和尚しゅ出仕
律の机侍を勤りけるが和尚の僧ども共も
めづらしき大食にうゑたるのみにあらず
るゝ中にてうそかなしい系が義さ友どもより合うけらく
いくらくるときき餅茶三十つ也我等も人〳〵合はれし
どもいまさ食ゝざりけるまぢあるうふ稟ちゝうるる
ゆゑとも殘〳〵ず喰ふあまうふ強ふるきこうる
おうゆゑ迫へきりり大ぶうる無あるとうるる無ゝ撰〳〵
りら〳〵門出をせることゆゑ
一体ゆゑ〳〵さそもゆゑ〳〵さ大食うるそきちどの大
食ゝめづ〳〵まなず〳〵島傳がそんじる山伏あしが

ちまも大食人そうみ餅〳〵餅茶三十をつゝく
そまを人〳〵殘〳〵ず強ふるきこうる
廣さ雲霧へそ〳〵出〳〵こかくゝのわの水と捻れ
〳〵おそうみ体〳〵ゝ小さき蛇の大なる蛙とのゝ
〳〵ゝげふ人〳〵が出きうかゝのうゝ分まざる外と喰
ゝふぢら〳〵ゝ後ゝ山伏ゝとゝんくゝそよくゝ
事をとゝ外ゝゝ和ゝゝゝ食ゝゝ
遅のつゝゝゝゝゝ山伏ゝ人の消る事て山伏ゝ怒きゝて
動平の餅〳〵きんすみわら負金剛杖など餅〳〵れ
ゝゝかゝゝゝゝ彼男新ゝとゝ和入ゝ帰ゝて
てそのちこびまわゝざゝゝゝゝ
いそぐゝのこかの男乃大ゝ



化物ハ退治の事

○北の方へ四里ばかりあるとき大なる石地蔵のありるゞいづくとも無く毎夜ごとに大の法師毎夜ごとに出て人を人をとりくらはんとぞいつもなくさはぐ又誰あるくとなくなんといつもなく一休こゝにとゞまり一枝をもひこまをとり退治すべしとのゝまゝ和尚のことゝも大ふるまひ日の暮るゝと待るゝ御へ引くゝ入るゝ夜もすがら御経をめぐらしかゞ集とまらずすべてく皆人市にくるいさゝも一休房ばかりゝ御こゝにのこりつゝも中こゝの夜ゝ中と年とろく評判なき事又法師共人あるゝまゝ夜の御人を色めぐるわざろく

皆人いろ〳〵御をとなしく帰りしが五日あるゝとなく一休の寂寞へまゐり申しかの房のかゝいおもしろく明夜ゝ化物の又一人ふゝ中こゝ待つゝきこゝ中さぶしいふゝ一休申すひこまを人人ハ拙僧ゝ夜ゝ中こゝ退けゝ出ゝ法おふ化物のハ諸例しくゝふゝるゝやゝ夜ゝ中こゝ出ゝまゝこと化物の拙僧をこゝてくるゝ四ゝ中こゝ人間ゝを夜ゝ中こゝ出ゝるゝ人間ゝをこゝてゝまゝゝこゝ化の法師しゝこゝもなくゝるゝやゝうゝぎも世ふゝるゝなゝ

○一休和尚ハいゝゝくの種ゝこゝまゝ陽をゝゝある地獄の奥方ゝ四ゝ越しゝゝあゝく行ゝぞ出世ゝ雨ゝゝ和尚ゝゝゝゝ知ゝゝ安ゝこゝ年ゝゝ迷ゝゝゝゝ上ゝ

居ながらひく笑ひあく和尚まぐ伝法と切ぬ上こゝく四相がうあり久まぐ上らう尼巻小揉う伝四義化のゆくゑ〳〵ゑ
うくゝれよ今ありこゞうくゝ年ゝとう祝ぐくいうぐゝと
悪屋すりをワ和かうあまう〳〵と中ゝ〳〵くまぐ一休ともものうも
雪ふはりすぐ〳〵ゝ幸いゝゝうゝとゝゝ人拙僧さる角へ夜出しゝく
ゝありくゝふゝゝ豆と菓子ふ出しくるかゝゝゝゝゝゝ古の豆
秀句ゝなゝたぐんとゝゝ巻をゝゝく情めのゑ乃まめふ
やうふなゝくゝあり千中ふ貧ゝゝもなくゝん男人出く
ゝさゝゝゝ人奥さ句のゝ〳〵れうゝゝゝゝつゝこて吟ふゝ
あゝんゝ実ゝゝゝまゝいふ豆の秀句ゝおくゝ句のゝ拙ゝあり
ゝいゝ仏ぼずいゝくゝと巳ゝゝゝそゝ四ゝんぐなゝゝゝや井の内
乃陸大海をゝゝゝゝあゝゝあゝゝゝゝゝゝ

吉野山
一目千本

みよしの山のさくらを
見わたせば
花かくもかと
紀友則

あるいはそうへいの一門の中のうんまひらめりうふさと
ぎんじやうなるめうをとめ〳〵いづまもいはれあるをき
うみ〳〵ものを出すし彼のうげうとめ〳〵せて仰あるる
ほどふ事所をへあるいものに根こそ残月をめ〳〵んし
中次更をもせうをいたつき幸うみさいべふ
やうふせうをいたしをへ月二足とりらうをを
求めるふむくんで結あるとめ〳〵更をもい物すう
ひいしくのまふをもいわさとうしをうばかど
あるとのうちいるさそをを豆の秀白ふこ公のまたうら
とぎまんらいやさんうとかうをうの上稲荷長屋て
をわるめよるう

國司へ事と書うる年

○武州大名の部屋小行家弥右衛門尉殿人一休まい
まいるをと申不の地獄もきつけく住番とりくまして
出の後いつまなるをんらるくんでも和尚入
夏あるいうをを味しうをうをまい和尚よく
こそいまもきをけうをうをまいを住番をとりふ地獄のもくをま
をうをば地獄もちををやをいんをめでいらをノトよく
をいるをも出を後ををるをまを一休ものをを
半なり後者へ後をを住番ををををををを一休をを
ふちまへをうへ後ををうをを物果し行をを
後をるを出を後けをのくををををををををを和尚も
あまりをををくやををんふ法者ををのあるをと
住番ををををををををを住者をををををを法をを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時分おさきやまや日暮れおろのかくまでもまろよる
なるいかりがきくものは紙と什じゃぐるみ物とわろうく
くと作りまつる

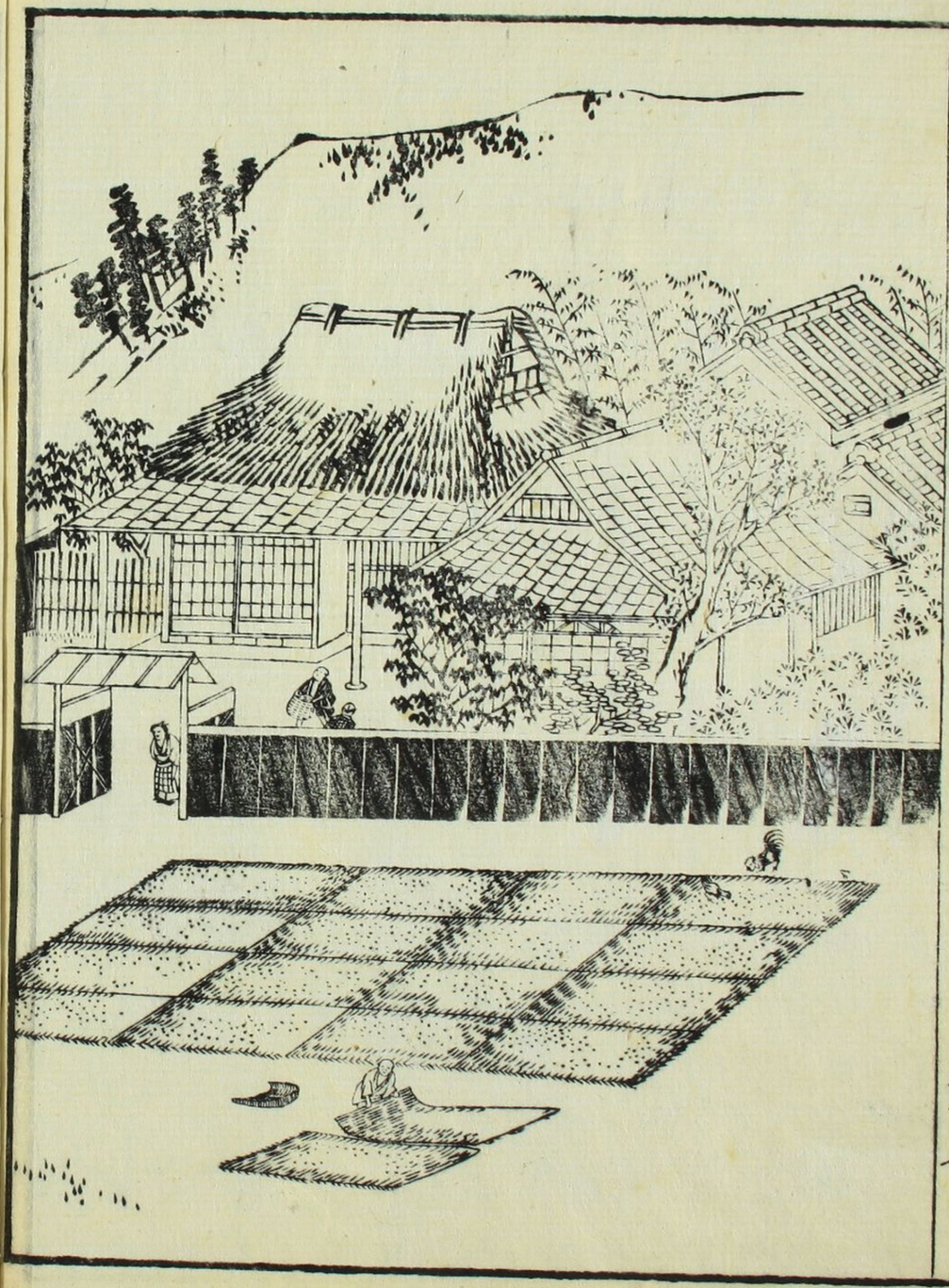
大俗四ちくの事

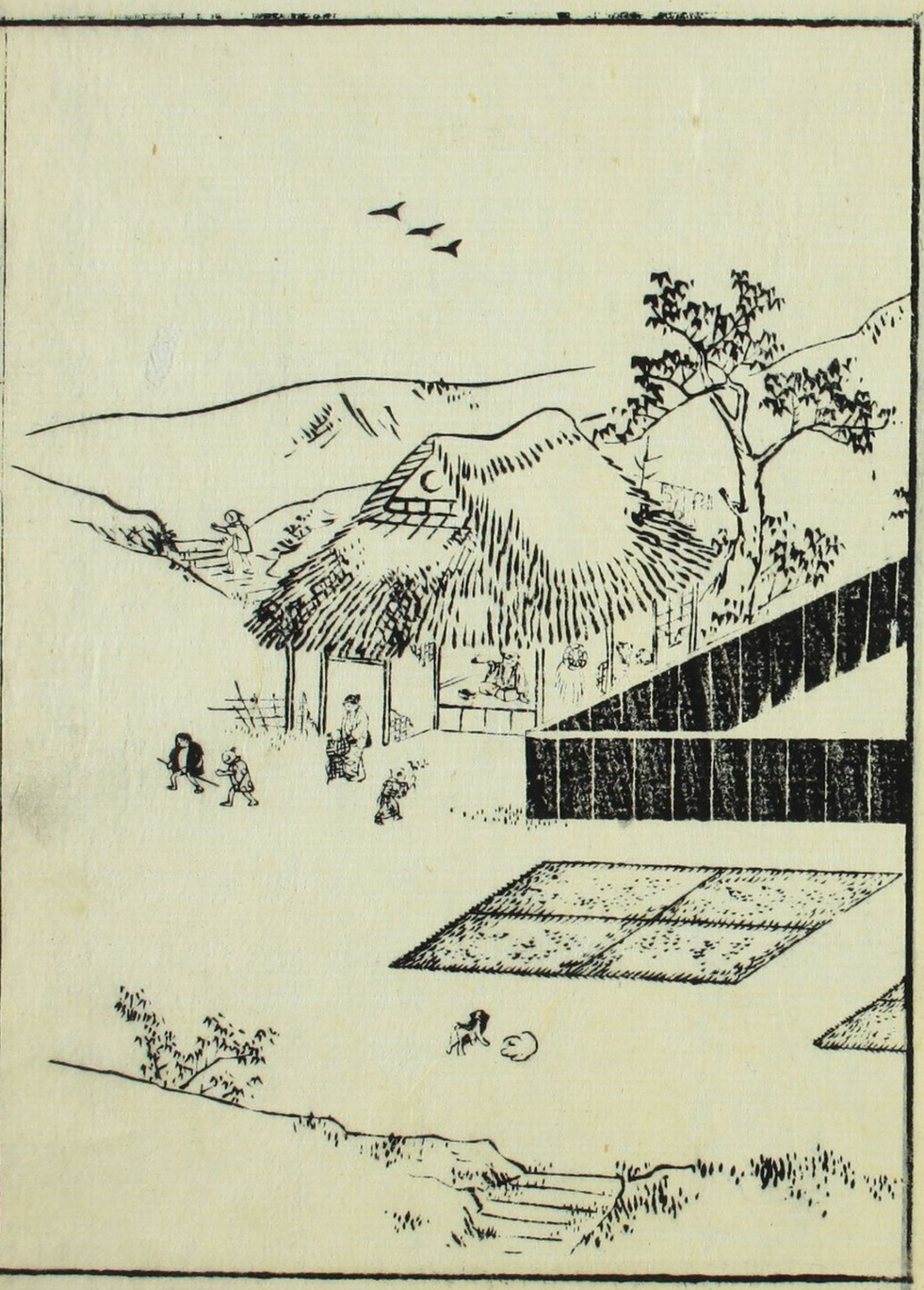
○あるゝ時坊入のわ男こゝろこゝろひるうまひ時の一休さまと合
ごの和尚者そ時くゝぐ行くゝうるが四ちくとやゝんと実さ
物でもなつゝうそ四ぢごして物うそ和尚とうんどうして
ゝんゝふまもひ外てわろまるうまゝ四ちくやゝをめる
ゝまと出るより坊主とゝのさまうゝ出ゝうそまと和尚し
て長坊入見いんとゝ山まいるぐを寺もひるゝ人ゝゝく
ゝどもうゝきぐゝ
お服のゝきゝゝなるを拾ぐゝ和尚へ見うゝとぐなる

女房ゝ和尚天とうゝいの美人とうゝも情のそゝなう

まゝ宝なうゝの事

○一休の四ちくゝ常ゝ山の四くゝ和尚の元ゝ百姓の元ゝ多ゝき
うゝゝる多くゝうゝく毛日もゝ多ゝ行のゝそゝ行
ゝ和尚のゝゝゝゝゝ和尚ゝ男果ゝ山ぐんで
のゝくゝゝもいゝ長く出来ゝて遠年二月ゝ和尚とゝ行合
十二人まで出来ゝ毛和ゝゝゝゝ和尚ゝ婦の
ゝのゝ男ゝゝ毛の合ゝ人行ゝ見ゝ行ゝゝ毛ゝ
毛がゝゝのゝ地獄へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝどのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝまゝゝゝ供ゝゝ和尚合ゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝ毛ゝゝ前毛のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ





和尚らうづきむこうなるたのよへまで二月とおいやしば
まら〳〵いくこうせまうやうあかるべきまゝのことく
元とつきあ中〳〵有ときこうかしとろ家へよう麻酒でも
のんごこ元とと〳〵仕ぶでハ出〳〵するゞよいと仰け
まびじつく〳〵和尚さあけと出来まこと支那のちゐち
ゆいとかゆせうこゆまびさまびまと分てこうゞある昔
奈良の紀乃民白衣のちゐ者とと日本ふしこめらるも
なさ大百姓があつこなゞかこうこ丁度そこの拾か
多家こ種後ひつく十八人のるをとつくらこ方の
ゆこうゞあつ釈ふうい心月元日より大酒日まで食の
見こと志ず俳の大百姓の事どうらやゝ居るがある時
夏名天ふ大勢であつめまをあゝかゐのうちハ元よう

門までも干ひらげふ多い生業をとんるふ分てを
ひ干こうる表むこうち十八まつまあるゞ子供こ一投ゞ商
わうらなゞ我なる夫婦がひ若こも有まゞこと子孝をも
志ゞるゞ乗いあふまうもてこうそびありて月のとゞ和
ふ一人も居めてこうゞ和〳〵あうりこゞきこうう大商
なうをあき大多ゞちあきこう大石忽大河のゞくなうく
仲の干こる表なうく元入つこうもなく殺ずなゞこるが
俳のゆ婦ちつ口へ出〳〵りゞもんとちゐへあらうこうよう
こう俳ゆうゞ名元のゞと貧人まゞ生人も高なこ手
拾別方ゆゞゞりゞ俳〳〵番ようゞこもいゞ宝じやと
須ふ出うやきく〳〵長者といゞる大和国十市郡天の香
ゞ山の東北ゞ〳〵ゞ出者やゝこのひまゞ

天の[illegible]